

＜今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ6章1-13節＞

パウロの真実な信仰の姿が、私たちに信仰的励ましを与えてくれる。

1 (1-2) 今が神の恩恵に与れる時、今が神から与えられる救いの日。

パウロは、かつてイザヤ書が告げた「神様の恵みと救いが与えられる日」(イザヤ 49:8)を用いながら、「それは今なのだ」と力を込めて語っています。しかし、この後を読むと、パウロはその福音を宣べ伝えるために様々な苦勞をして来たことが分かります。だのになぜ、「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」(2)と言えるのでしょうか？

2 (3-7) 人を躓かせない、そのために義の武器を用いる。

パウロがその次に語っていることは、人を躓かせないために(「人に罪の機会を与えず」(3)の意味)、神様を知った者らしく徹底して「義の武器」(7)を持って対処して来たということです。色んな苦しみの中に置かれることはあつたし(4b-5)、その中で「神に仕える者としての実を示して来た」(4a)と語っています。苦しみがないことが信仰の恵みでも救いに入れられたことでもないのです。苦しみの中に置かれた時に、「大いなる忍耐を持って」(4)、義なる神様に喜んでもらえる義の武器(6-7)をもって生きられるのです。そのことを示すのが私たち信仰者の目指す生き方なのだと言っているのです。

3 (8-10) この世の基準では貧しくとも、神の基準で豊かであれ。

人は誰でもこの世から色んな評価を受けます。しかしそれは誤解に基づくものであったり、まだ最終結果が出ていない途中段階のものに対する評価であつたりします。それらに一喜一憂しては身が持ちません。パウロの軸足の置き所ははっきりしています。イエス・キリストを通してご自身を示して下さった神様とその方が良しとされる生き方です。人の評価は揺れ動きます。上に述べたようなもので評価せざるを得ないからです。「今が恵みの時、今が救いの日」とパウロが叫ぶのは、最後の日まで変わることなく続く神様の評価を知り、それによって立つて生きればよい恵みと救いの中に入れられたからです。苦難はあるし、あってもいいのです。神様をしっかりと見つめて生きるならば！